

第4部 関連器物から見た事故

日常生活の中では、エスカレーターで転んだり、遊具から落ちたり、日々使用する様々なもの（器物）により事故に遭うことが多くあります。

ここでは、これまでに多くの事故が発生している器物について事故の傾向をまとめました。また、使い方によっては思いがけない危険が潜んでいる器物についても取り上げました。

1 エスカレーター

エスカレーターは、駅やショッピングセンター等、多くの場所で利用されています。エスカレーターに乗っていてバランスを崩して転んだり、小さな子どもが靴をはさまれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成28年から令和2年までの5年間で、6,613人が救急搬送されています。

令和2年中は1,069人が救急搬送されており、65歳以上の高齢者が全体の7割以上を占めています（図4-1）。

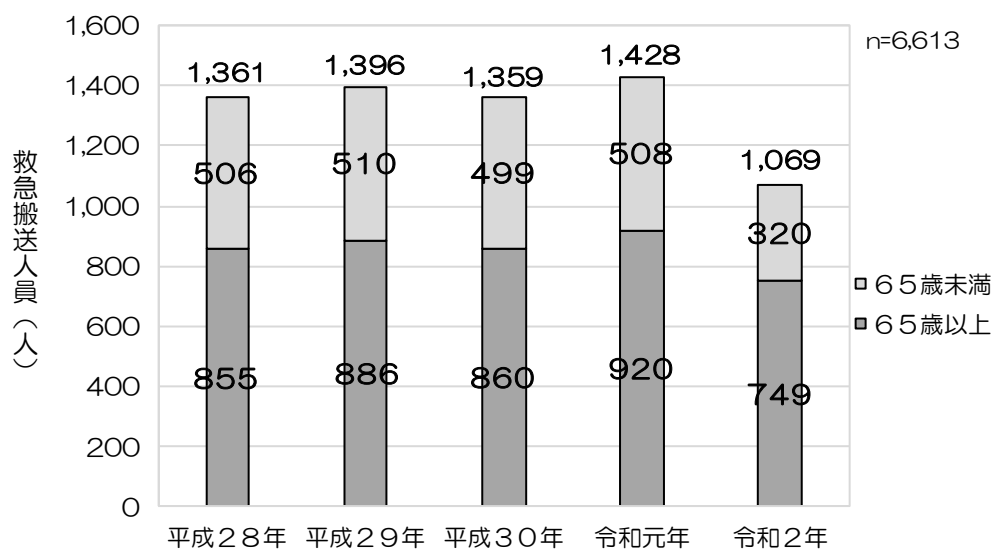


図4-1 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別に見ると、75歳から89歳までの各年齢層で150人以上が救急搬送されています（図4-2）。

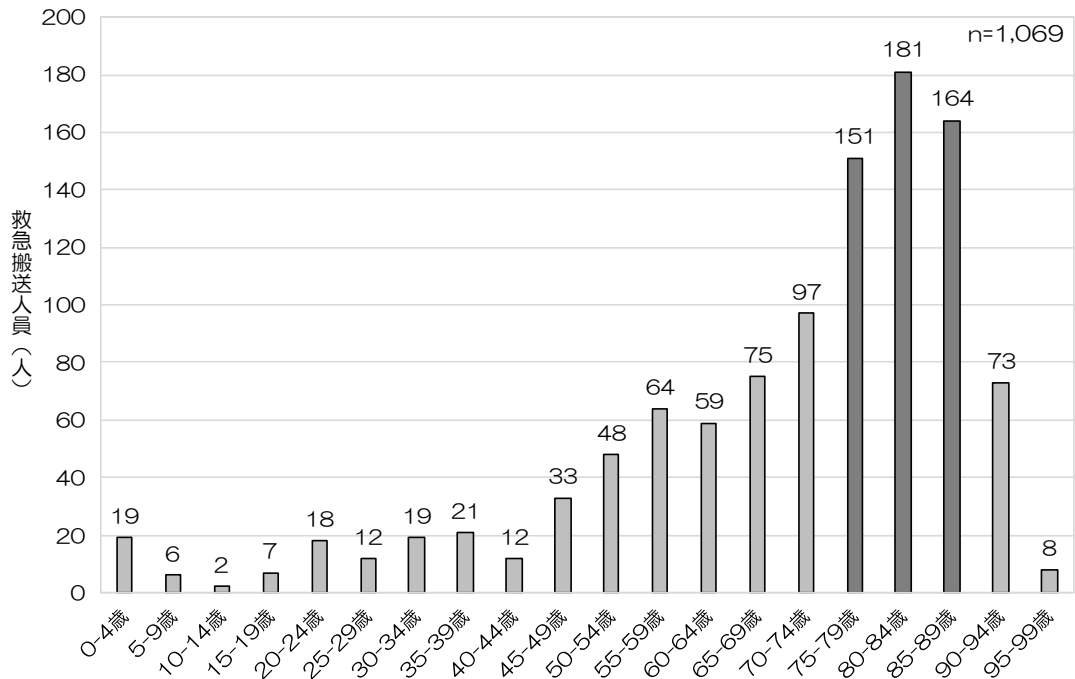


図4-2 年齢層別の救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

高齢者と高齢者以外（64歳以下）の時間帯別救急搬送人員を見ると、高齢者では10時台から15時台までに多く発生しています。また、64歳以下では23時台が最も多くなっています（図4-3）。

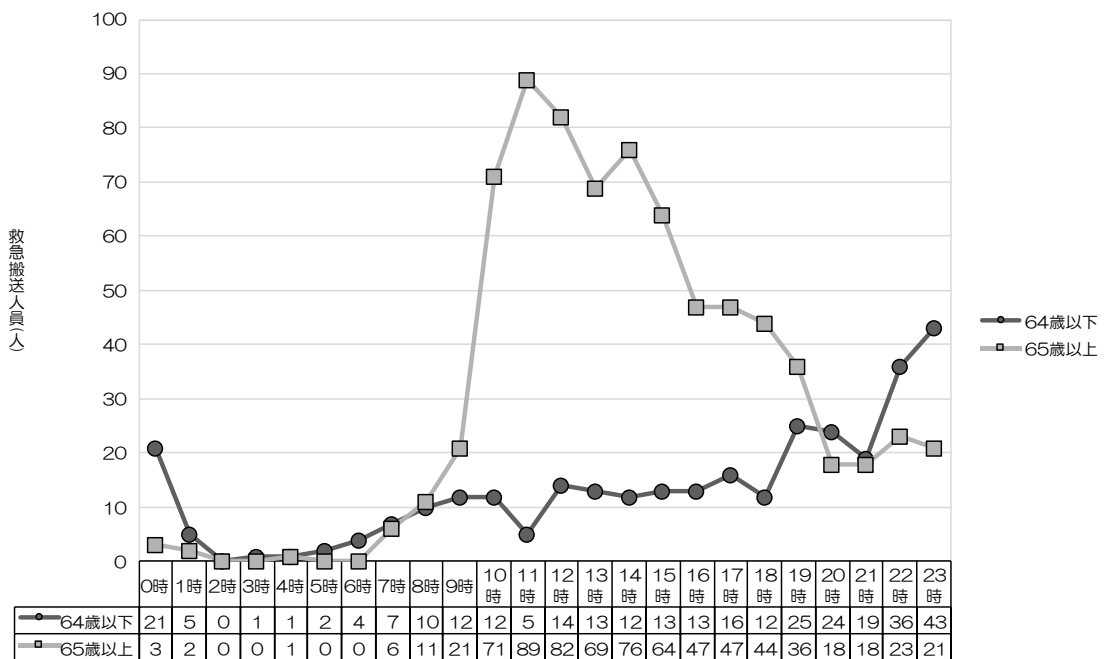


図4-3 時間帯別の救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エスカレーターでの事故を事故種別ごとに見ると、「ころぶ」事故、「落ちる」事故が9割以上を占めています（図4-4）。

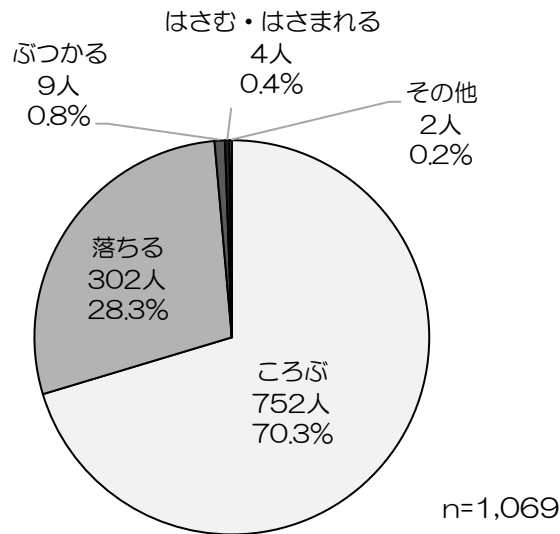


図 4-4 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エスカレーターで受傷して救急搬送された人の2割は中等症以上と診断されています（図4-5）。

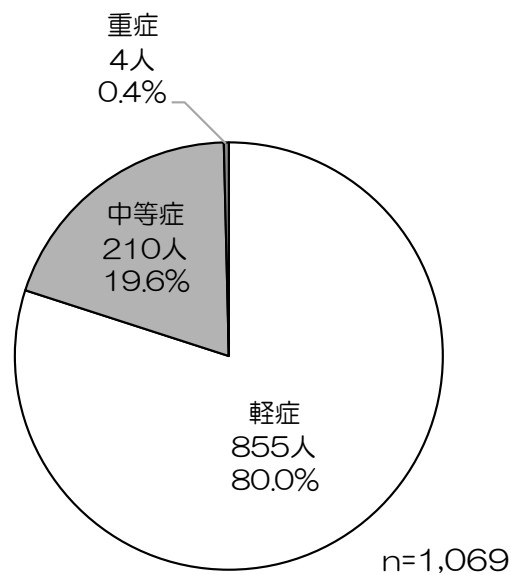


図 4-5 初診時程度別の救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所で見ると、駅などの道路・交通施設で最も多く発生していますが、高齢者では店舗・遊技施設等が約5割を占めています（図4-6、図4-7）。

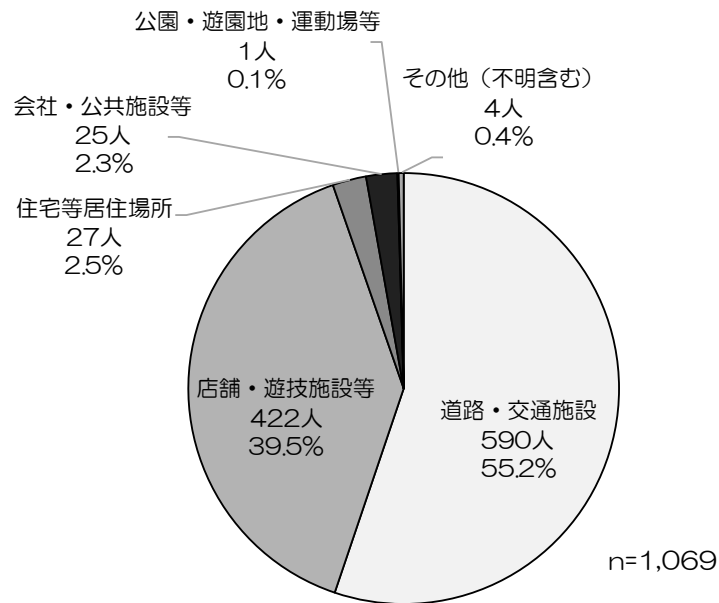


図4-6 発生場所別の救急搬送人員

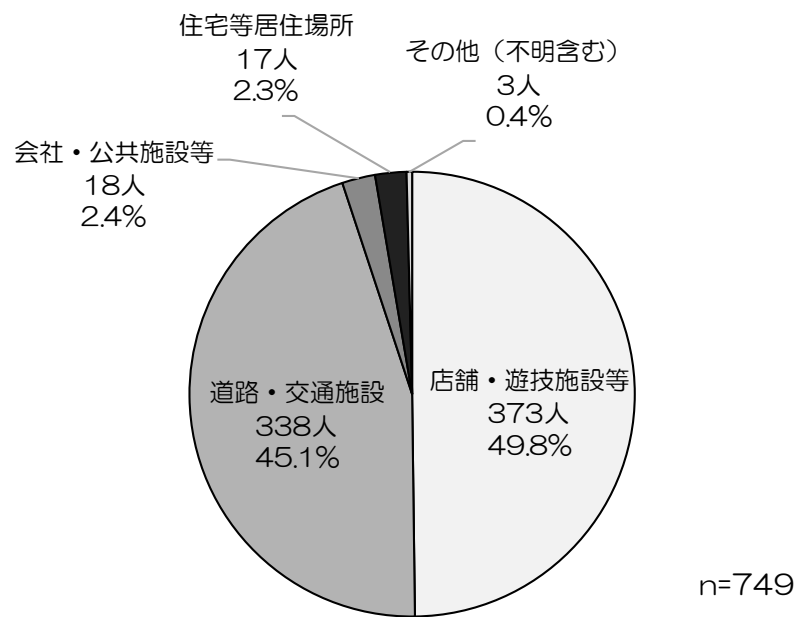


図4-7 発生場所別の救急搬送人員(高齢者)

(7) エスカレーターでの事故事例

【事例1 飲酒後に転倒】

飲酒後、エスカレーターに乗っている際に前のめりに転倒し、エスカレーター下まで転落した（70代 軽症）。

【事例2 靴紐がはさまれる】

エスカレーターで下っていたときに、ほどけていた靴紐がエスカレーターにはさまれて転倒し、受傷した（53歳 中等症）。

【事例3 指がはさまれる】

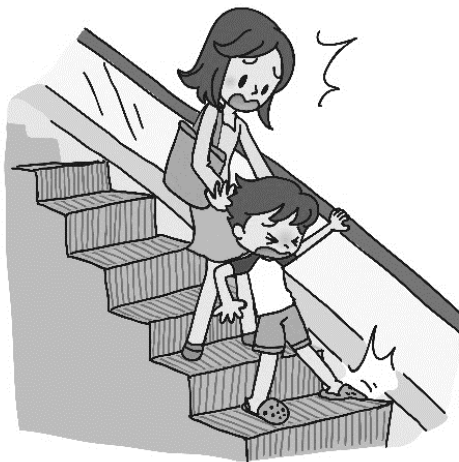
上りエスカレーターに乗っているときに、荷物が落ちたため手で取ろうとした際、隙間に指がはさまれ受傷した（4歳 軽症）。

【事例4 物にぶつかり転倒】

下りエスカレーターに乗っていたところ、後方から転落してきたキャリーケースが体にぶつかり受傷した（40代 中等症）。

【エスカレーターでの事故防止】

- 手すりにつかまりましょう。
- 飲酒後の事故が多く発生しているため十分に注意しましょう。
- エスカレーター上の歩行は、バランスを崩しやすく、他の利用者と接触するおそれがあります。ステップに立ち止って利用しましょう。
- 靴のはさまれ等を防止するため、ステップの黄色い線の内側に立ちましょう。
- 買い物カート等を乗り入れると、バランスを崩すおそれがあるため、注意しましょう。
- 子どもがエスカレーター近くで遊ばないように注意しましょう。



2 エレベーター

エレベーターは、共同住宅やビル、店舗等、あらゆる場所で利用されています。エレベーターの乗降時に転んだり、小さな子どもが手や指をはさまれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成28年から令和2年までの5年間で672人が救急搬送されています。令和2年中は90人が救急搬送されています（図4-8）。

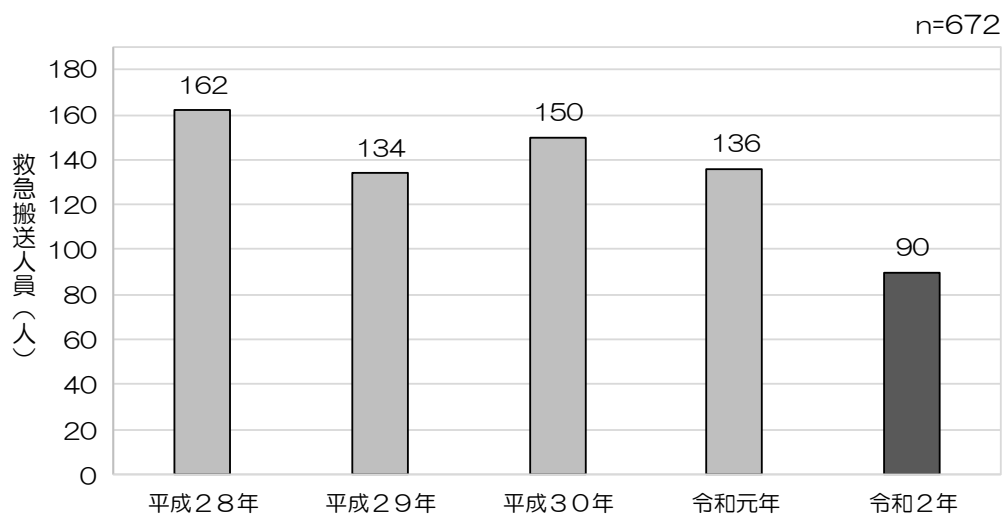


図4-8 年別の救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別に見ると、80歳から84歳までが16人と最も多くなっています。次いで、0歳から4歳までが15人と多くなっています（図4-9）。

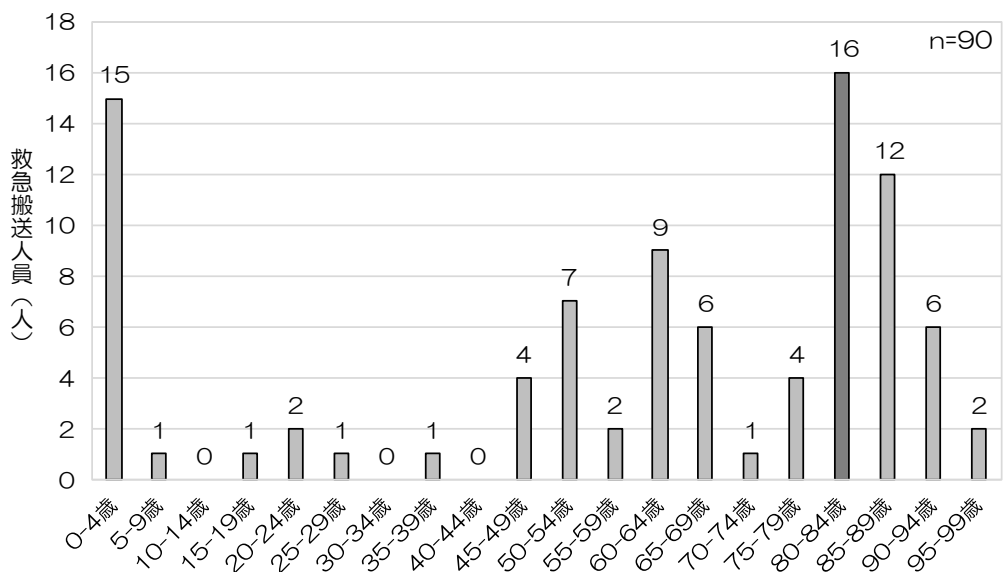


図4-9 年齢層別の救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

時間帯別救急搬送人員を見ると、17時台が14人と最も多く、全般的に日中の時間帯が多くなっています（図4-10）。

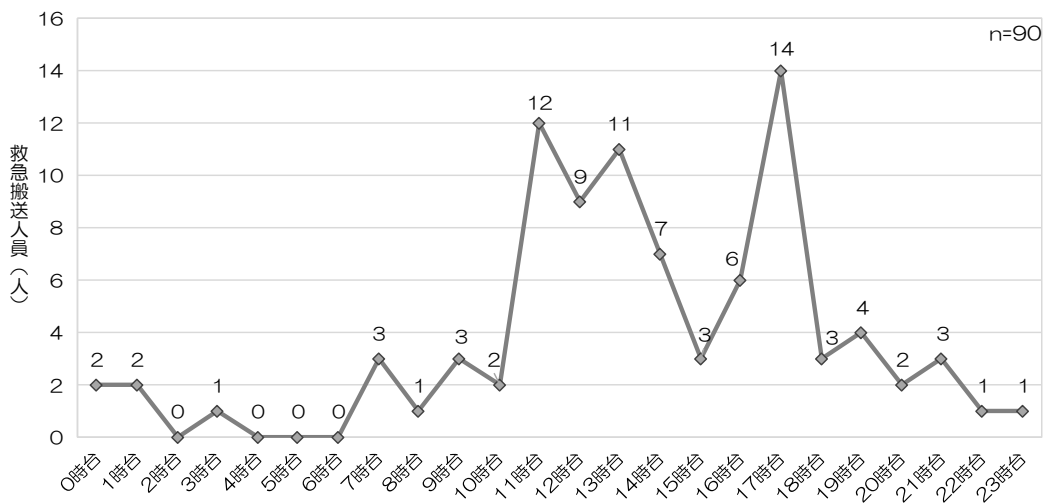


図4-10 時間帯別の救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エレベーターでの事故を事故種別ごとに見ると、5割以上がころんで受傷しています。また、手や指等が扉や戸袋にはさまれたりして受傷する事故も多く発生しています（図4-11）。

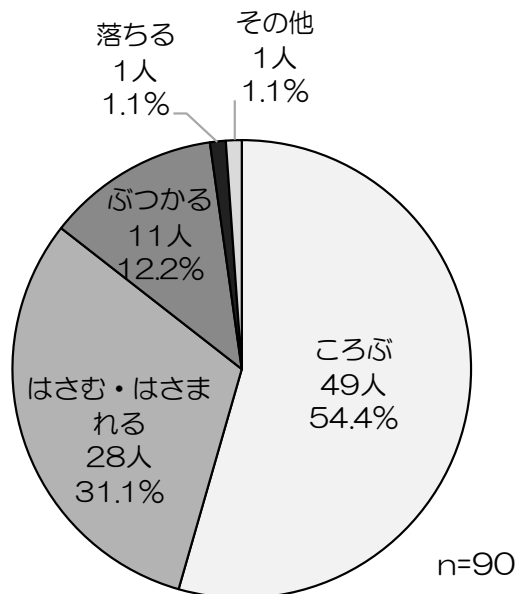


図4-11 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エレベーターでの事故で救急搬送された人の約4割は、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されています（図4-12）。

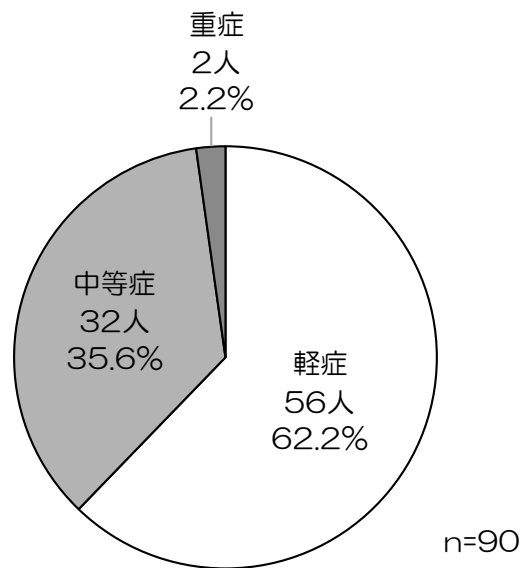


図4-12 初診時程度別の救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所で見ると、住宅等居住場所や店舗・遊技施設等、道路・交通施設で多く発生しており、8割がこの3つの場所で発生しています（図4-13）。

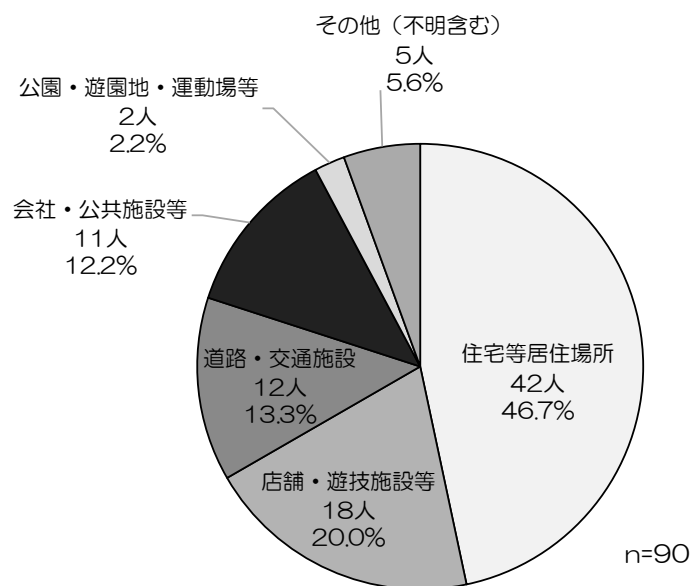


図4-13 発生場所別の救急搬送人員

(7) 0歳～5歳のエレベーターによる事故の内訳

0歳から5歳までのエレベーターによる事故は、15人中14人が「はさむ・はさまれる」事故となっており、手や指等をはさまれる事故が多くなっています（表9）。

表9 0～5歳のエレベーターによる事故の内訳

	はさむ・はさまれる		ころぶ	総計
	戸袋	扉		
0歳	0	0	0	0
1歳	3	5	1	9
2歳	4	1	0	5
3歳	0	1	0	1
4歳	0	0	0	0
5歳	0	0	0	0
小計	7	7		
総計	14		1	15

(8) エレベーターでの事故事例

【事例1 戸袋にはさまれる】

ドアが閉まる際に、抱いていた子どもの手が戸袋にはさまれて受傷した（2歳 軽症）。

【事例2 扉にぶつかる】

急いでエレベーターに乗ろうとしたところ、ドアに衝突してしまい転倒し、受傷した（80代 軽症）。

【エレベーターでの事故防止】

- 乗降時は床との段差に注意し、駆け込みなど無理な乗降はやめましょう。
- ドアの開閉時にはドアに触れず、荷物や衣服などが巻き込まれないように注意しましょう。また、子どもはドアから離れた位置にさせましょう。
- エレベーターを使った作業時の事故は、重症事故につながることを認識し、作業手順、制限重量などに十分注意しましょう。

3 自転車の幼児用座席

保護者が自転車の幼児用座席に子どもを乗せていて転倒したり、子どもだけを残して自転車を離れ、自転車が倒れるなどして乳幼児が受傷する事故が多く発生しています。

(1) 年別搬送人員

自転車の幼児用座席から転落するなどして平成28年から令和2年までの5年間に967人の乳幼児（0歳から5歳まで）が救急搬送されています。令和2年中は136人が救急搬送されています（図4-14）。

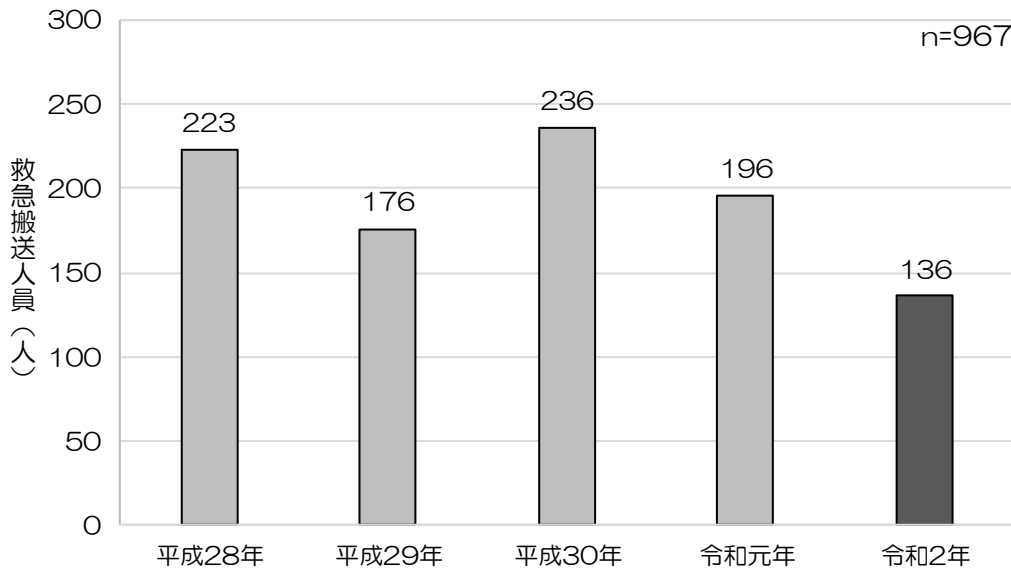


図4-14 年別の救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、1歳児、2歳児の事故が多く発生しています（図4-15）。

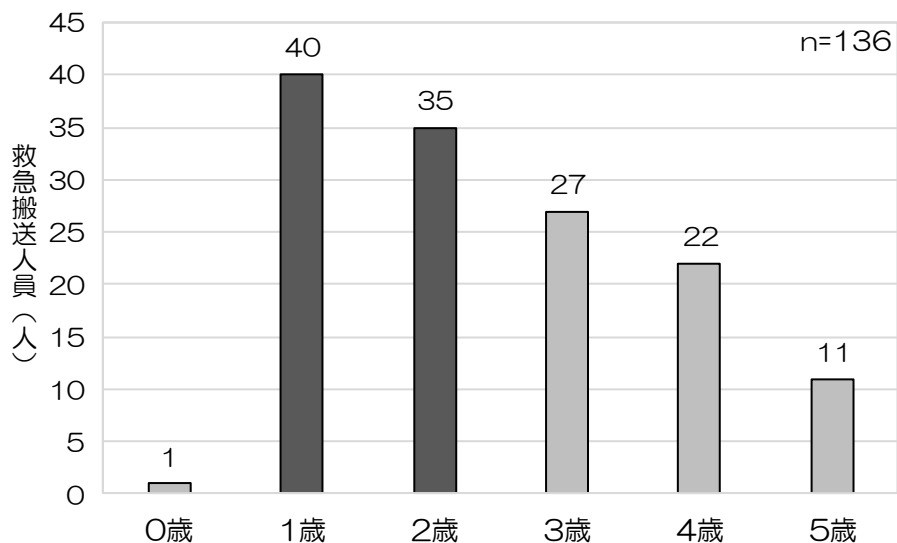


図4-15 年齢別の救急搬送人員

(3) 初診時程度別搬送人員

初診時程度では、軽症が9割以上となっています（図4-16）。

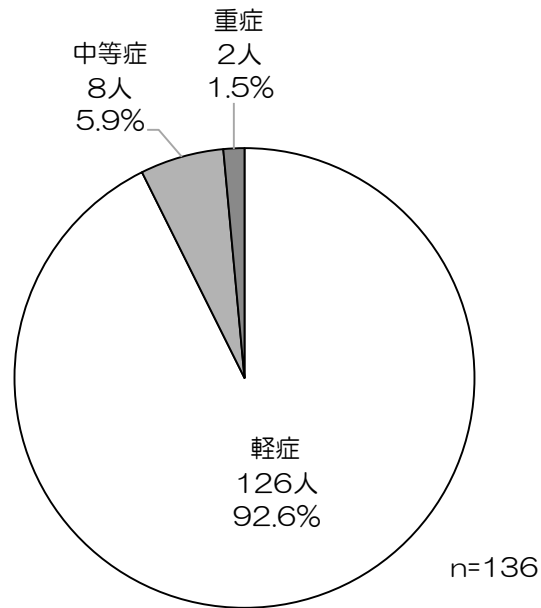


図4-16 初診時程度別の救急搬送人員

(4) 受傷部位別搬送人員

受傷部位別に分類すると、全体の9割以上が顔や頭を受傷しています。また、足や腕を骨折する事故も発生しています（図4-17）。

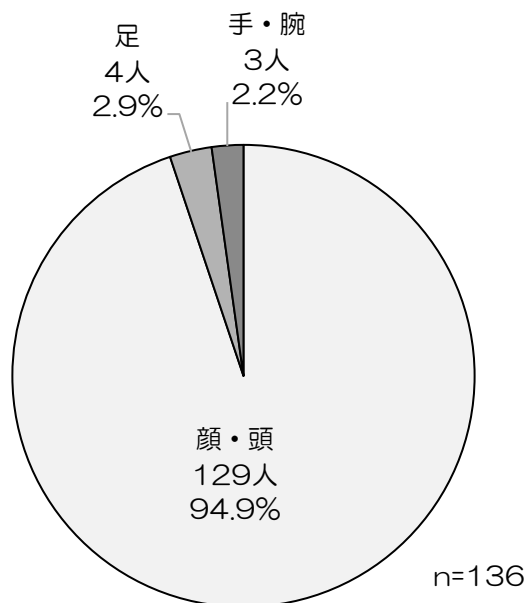


図4-17 受傷部位別の救急搬送人員

(5) 自転車の幼児用座席での事故事例

【事例1 バランスを崩す】

親が運転する自転車がバランスを崩して転倒し、後方の座席に乗っていた子どもが頭部をぶつけ受傷した（1歳 中等症）。

【事例2 目を離した際に】

停車させた自転車の前後の座席にそれぞれ子どもを乗せていたところ、後方の座席に乗っていた子どもが自転車から降りたため自転車が倒れ、前方の座席に乗っていた子どもが受傷した（2歳 軽症）。

【自転車の幼児用座席での事故防止】

- 子どもを自転車の幼児用座席に乗せたまま自転車から離れないようにしましょう。
 - ヘルメットは、頭部への衝撃を緩和するのに有効であるため、ヘルメットを着用させてから自転車に乗せましょう。
 - 転落防止のため、備え付けのベルトを締めましょう。
 - 自転車走行中以外にも事故が発生することを意識しましょう。
 - ルールとマナーを守った運転を心がけましょう。
- ※ 平成25年7月1日に「東京都自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」が施行されました。



4 遊 具

(1) 年別搬送人員

遊具による事故で、平成28年から令和2年までの5年間に4,515人の子ども(12歳以下)が救急搬送されています。令和2年中は940人が救急搬送されています(図4-18)。

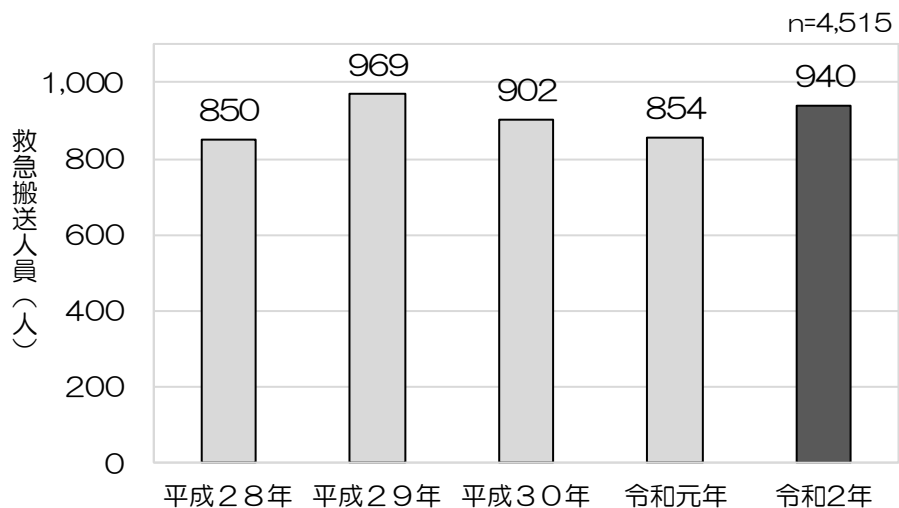


図4-18 年別の救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、2歳が最も多く130人が救急搬送され、次いで、3歳が102人となっています(図4-19)。

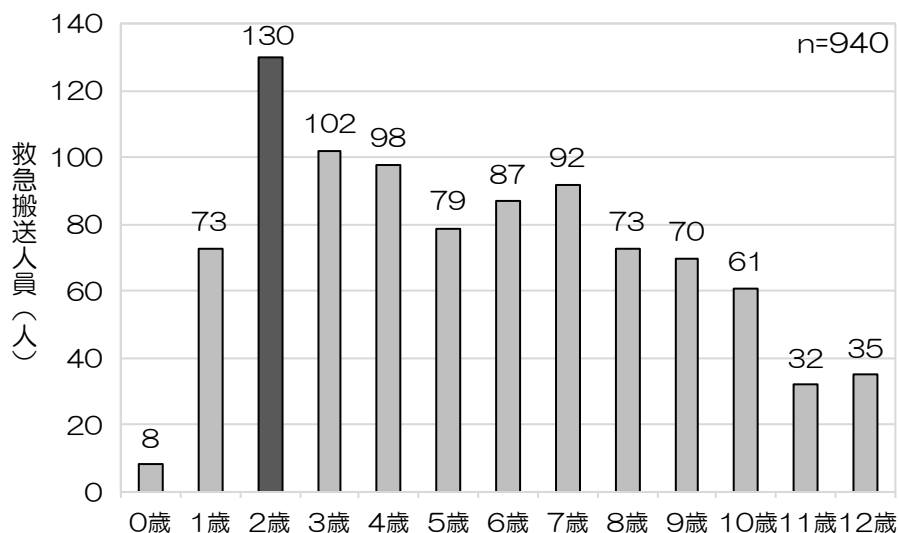


図4-19 年齢別の救急搬送人員

(3) 月別搬送人員

月別では、11月が最も多く、140人が救急搬送されています。次いで12月に101人の子どもが救急搬送されています（図4-20）。

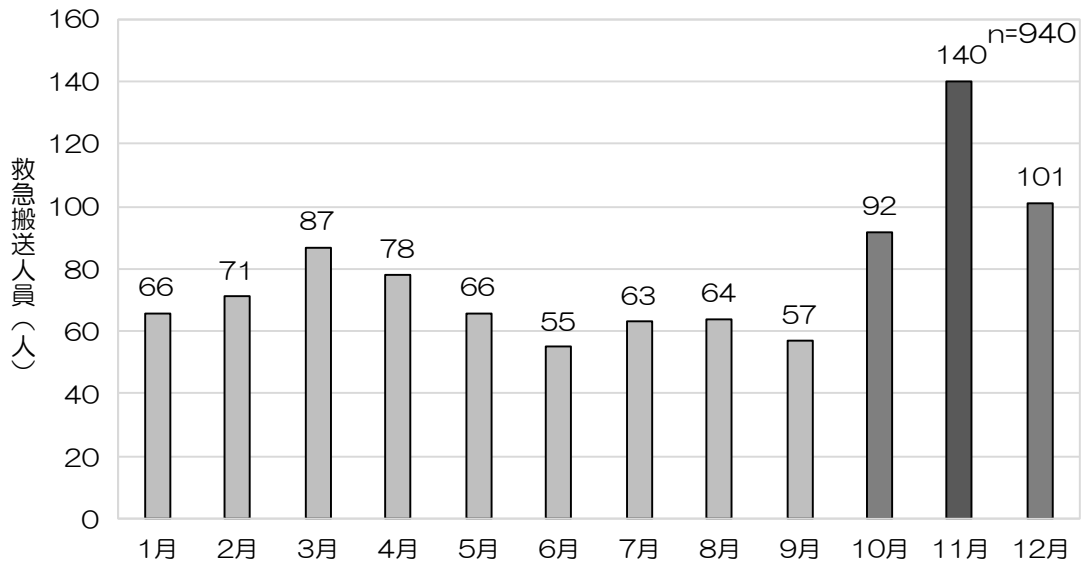
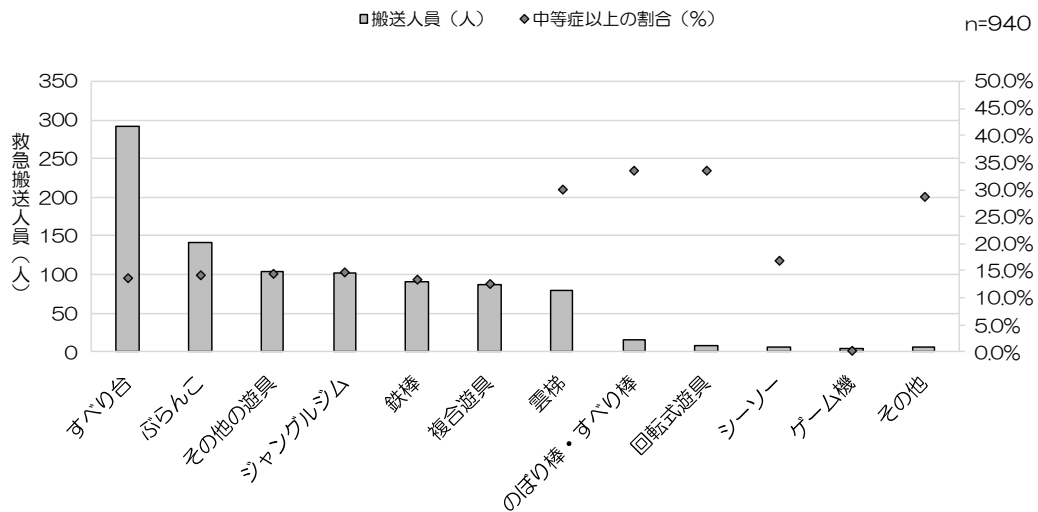


図4-20 月別の救急搬送人員

(4) 遊具別の搬送人員と中等症以上の割合

遊具別に見ると滑り台での事故が最も多く発生しています。また、のぼり棒・すべり棒と回転式遊具で中等症以上の割合が3割以上と最も高くなっています（図4-21）。



遊具	滑り台	ぶらんこ	その他の遊具	ジャングルジム	鉄棒	複合遊具	雲梯	のぼり棒・すべり棒	回転式遊具	シーソー	ゲーム機	その他
救急搬送人員	291人	142人	104人	103人	91人	88人	80人	15人	9人	6人	4人	7人
中等症以上の割合	13.4%	14.1%	14.4%	14.6%	13.2%	12.5%	30.0%	33.3%	33.3%	16.7%	0.0%	28.6%

※その他の遊具とは、吊橋遊具、トンネル遊具、はしご遊具等

※その他とは、アトラクション、電動立ち乗り二輪車型遊具等

図4-21 遊具別の救急搬送人員と中等症以上の割合

(5) 遊具での事故事例

【事例1 滑り台】

滑り台に上がったところでバランスを崩して約1.5mの高さから転落し、受傷した(12歳 中等症)。

【事例2 雲梯】

公園の雲梯に飛び移ろうとした際、棒をつかみ損ねて落下し、受傷した(8歳 中等症)。

【事例3 ジャングルジム】

自宅内のジャングルジムで遊んでいる際に、高さ80cmから転落し、腕を受傷した(3歳 中等症)。

【事例4 ブランコ】

ブランコで立ちこぎをしていてジャンプした際に、前方の柵に腹部をぶつけて受傷した(12歳 中等症)。

5 ガスによる事故

(1) 年別発生件数

ガスによる事故（火災、不救護を除く）は、平成28年から令和2年までの5年間に183件発生しています。令和2年中は11件発生しています（図4-22）。

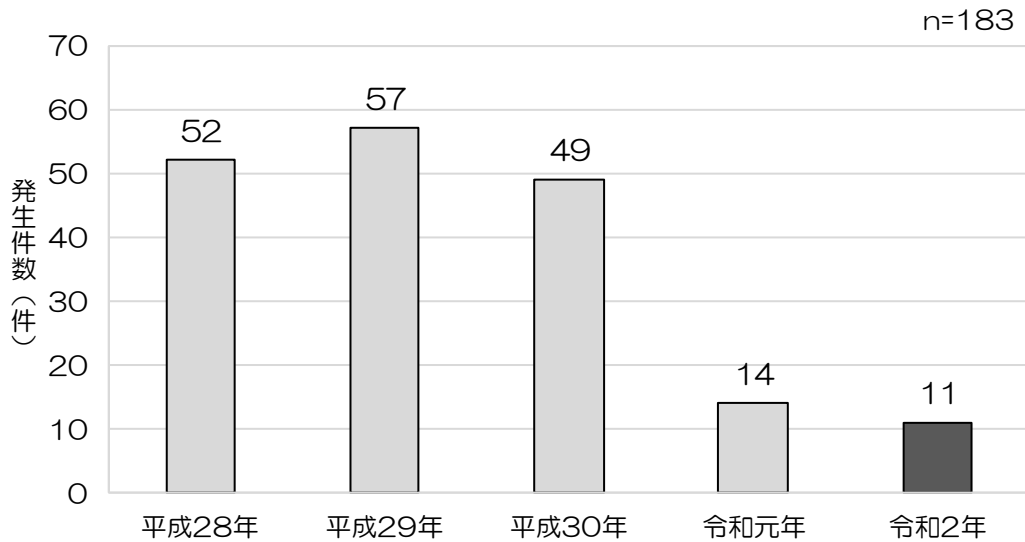


図4-22 年別の発生件数

(2) 月別発生件数

月別では、6月が3件と最も多くなっています（図4-23）。

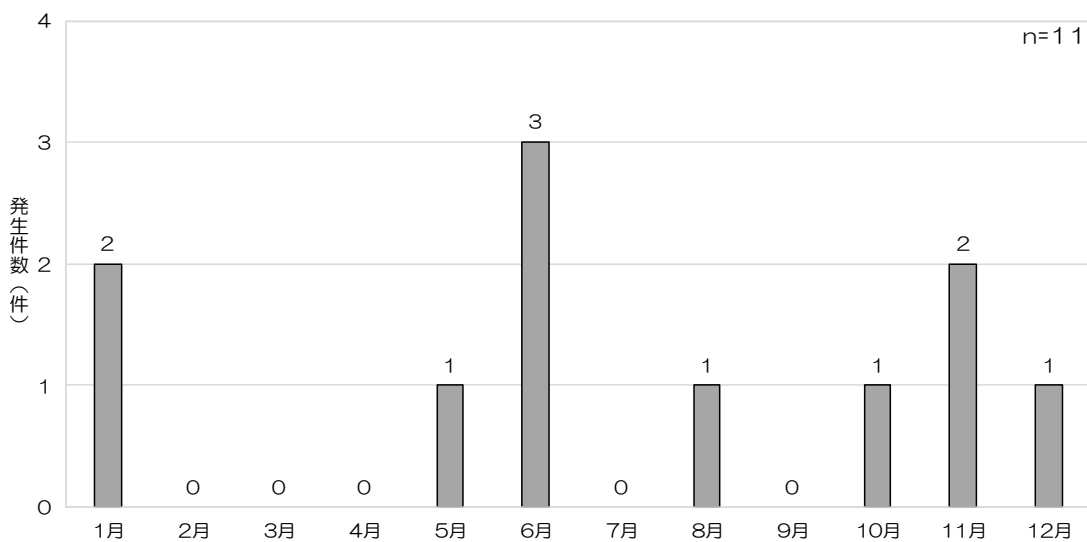


図4-23 月別の発生件数

(3) 年齢層別搬送人員

令和2年中にガスによる事故（火災、自損、不救護を除く）で、19人が救急搬送されています。年齢層（5歳単位）別に見ると、45歳から49歳までと55歳から59歳までが3人と最も多くなっています（図4-24）。

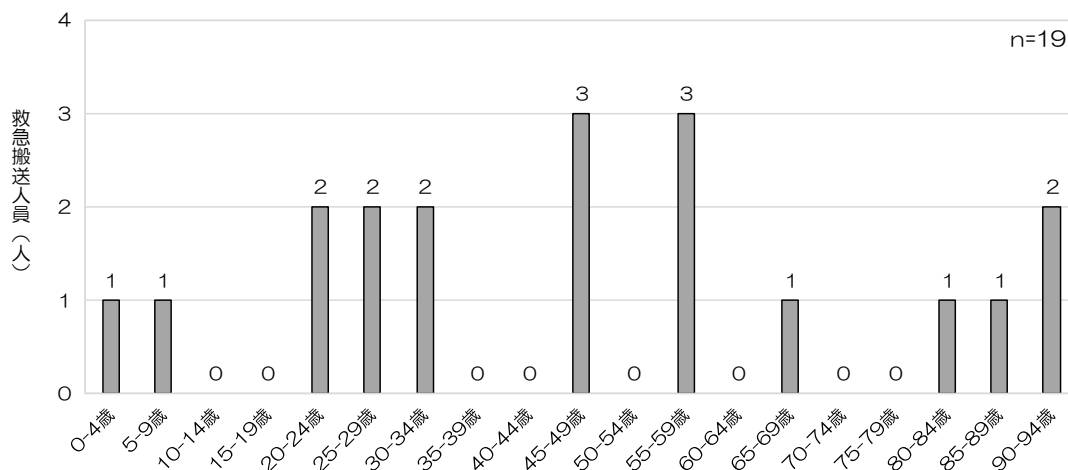


図4-24 年齢層別の救急搬送人員

(4) 発生場所別発生件数

事故発生場所で見ると、8割以上が住宅等居住場所と店舗・遊技施設等で発生しています（図4-25）。

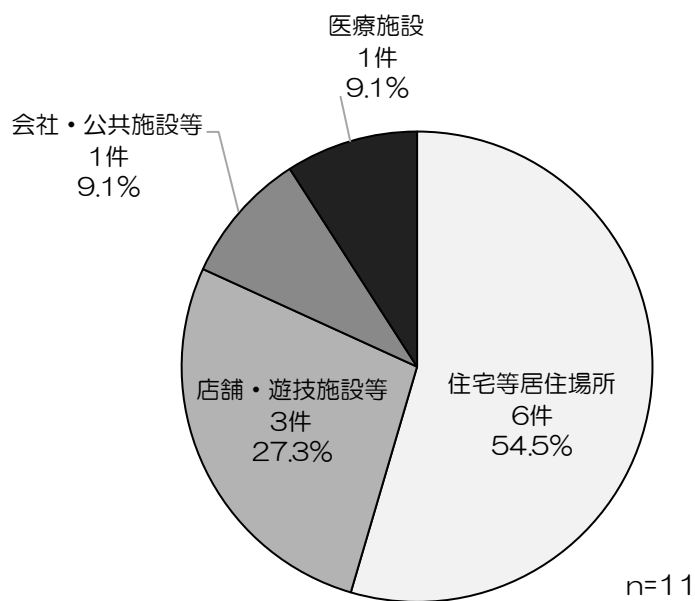


図4-25 発生場所別の発生件数

(5) 初診時程度別とガス種別ごとの搬送人員

ガスによる事故で搬送された人の約6割が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断され、重症以上も2割以上を占めています（図4-26）。

ガス種別ごとに見ると一酸化炭素中毒による搬送が最も多く約6割を占めており、次いでエアゾール缶ガスとなっています（図4-27）。

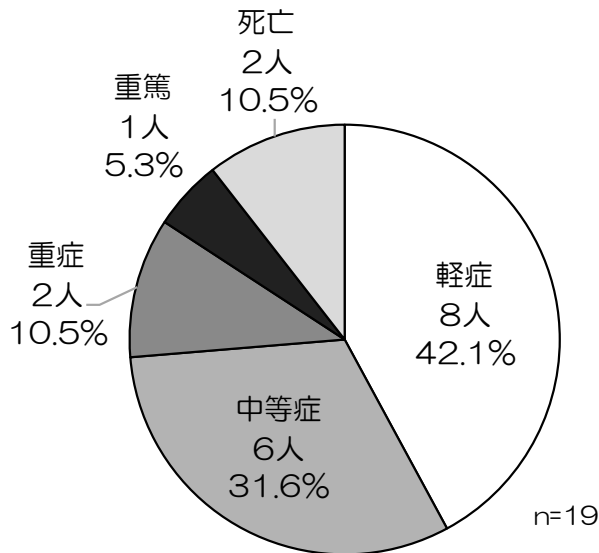


図4-26 初診時程度別の救急搬送人員

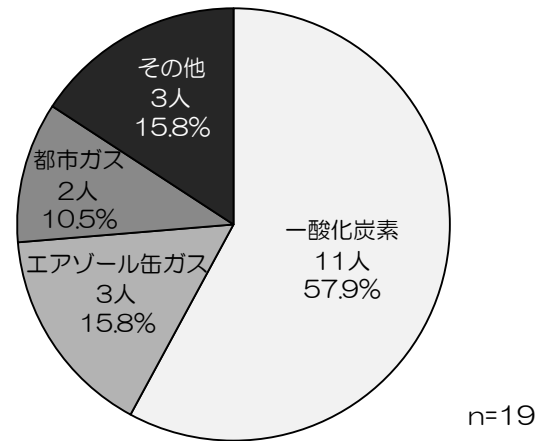


図4-27 原因別の救急搬送人員

(6) ガス種別ごとの発生件数

ガス種別ごとに見ると、一酸化炭素中毒が5件と最も多くなっています（図4-28）。一酸化炭素による事故のうち「炭」が3件と最も多くなっています。

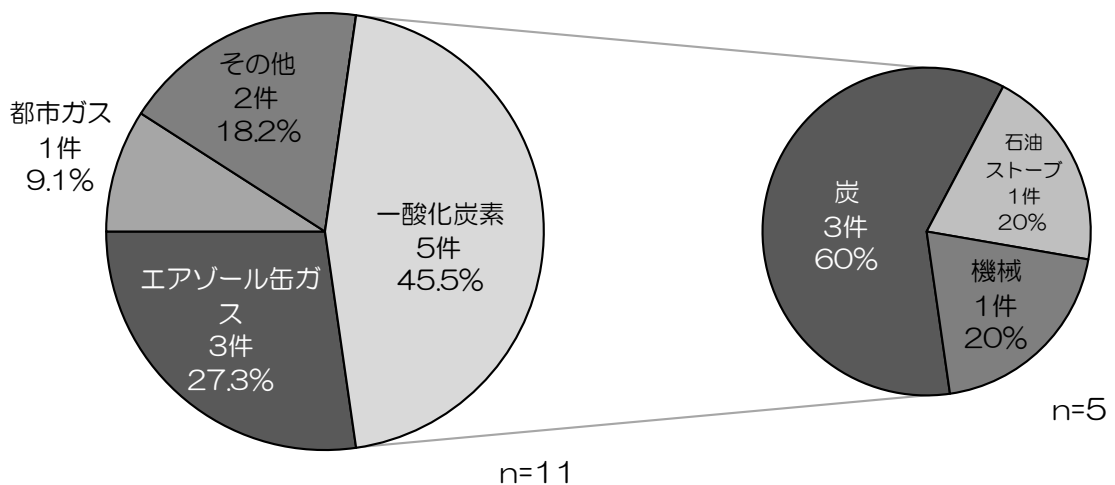


図4-28 ガス種別ごとの発生件数

(7) 一酸化炭素中毒による初診時程度別搬送人員

一酸化炭素中毒による事故で救急搬送された人の9割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されており、重症以上も全体の4割以上を占めています（図4-29）。

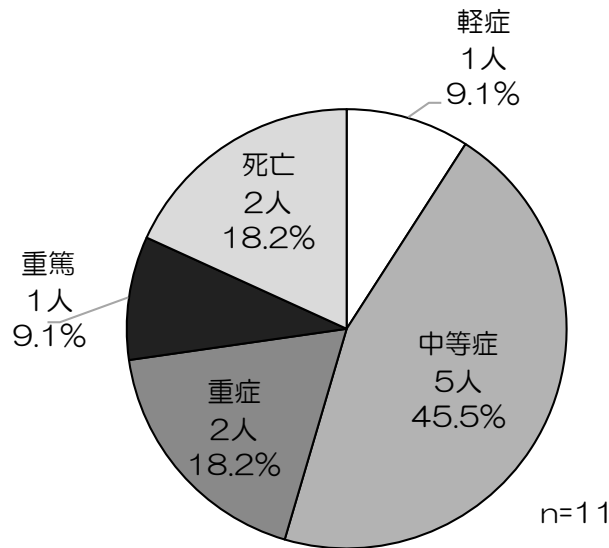


図4-29 初診時程度別の救急搬送人員（一酸化炭素）

(8) ガスに関連する事故事例

【事例1 一酸化炭素中毒】

囲炉裏で使用していた調理用炭が不完全燃焼を起こして一酸化炭素が発生し、3名が倒れた（90代 重症 90代 中等症 80代 中等症）。

【一酸化炭素での事故防止】

- 十分な換気により、室内の一酸化炭素濃度が下がることから、火気設備・器具を使用の際は換気扇の使用や定期的に窓等を開けるなどして換気を十分に行いましょう。また、使用中に少しでも異常を感じたら、使用を中止するとともに十分な換気を行いましょう。
- 不完全燃焼が起こると一酸化炭素が発生することから、火気設備・器具の定期的な点検と清掃を行いましょう。
- 発電機やバーベキュー用こんろなど屋外での使用が想定されている火気器具等は屋内では使用せず、火気設備・器具の使用法を守りましょう。
- 一酸化炭素は、無色・無臭で気が付きにくい気体です。一酸化炭素を感知する警報器を設置することも有効です。

【事例2 スプレー缶のガス抜き】

厨房器具付近でスプレー缶を廃棄処分するために穴をあけていたところ、噴出したガスに引火し、下肢を受傷した（30代 中等症）。

【穴あけ・ガス抜きでの事故防止】

- 廃棄する場合は、必ず中身を使い切り、各区市町村が指定するごみの分別を守って捨てましょう。
- 厨房器具や暖房器具付近の高温となる場所や、直射日光と湿気を避けて保管し、厨房器具や暖房器具等の付近では使用しないようにしましょう。
LPGなどの可燃性ガスは噴射剤として使われていることが多いので、使用前には必ず製品に記載されている注意書きを確認しましょう。

